

漢法苞徳塾資料	No. 236
区分	治療論・配穴
タイトル	配穴原理について 1
著者	八木素萌
作成日	1989.08.26~7 第六回夏期合宿資料

## ☆鍼灸の治療

◇◇経脈の疎通を図って陰陽・気血栄衛を調和させる。陰陽が調和し衛気栄血が調和よく順調に機能していれば、それは健康な状態である。鍼灸治療は経絡の「性質・作用・機能」と穴の「性質・作用・機能」とそれらの間の相互の多面的な関連性を運用する事によって、薬物の服用によることなく体表に刺鍼し或は点灸する事によって「経脈の疎通を図って陰陽・衛気栄血を調和させる」医术である。

### ◇◇『難経』の配穴原理

1. 虚スルモノハソノ母ヲ補ナイ実スルモノハソノ子ヲ瀉ス (69 難)
2. 虚セズ実セズンバソノ経ヲ取ル (69 難)
3. 実スル経マタハ穴ハソレヲ剋スル経マタハ穴ヲ補スコトニヨッテ実シテイルモノヲ制御スル (75 難)
4. 実ヲ剋スルモノガ補サレテモ制御スルカヲ發揮デキナイ状態ノ時ハ「瀉火補水」(その経または穴の子を補い剋を受けている所を瀉す)ノ法ヲ用イル (75・81 難)
5. 陰経ト陽経ノ五行穴ハ相剋的ナ関係ヲ付与サレテオリ相互ニ制御シ調整シアウ機能関係ヲ持ッテイル (33・64 難)
6. 陽病ハ陰(募穴)ニ陰病ハ陽(腧穴)ニ行ク (67 難)
7. 原穴ハ五臓六腑ニ病在ルヲ治ス (66 難)
8. 八会穴(中脘=腑会・章門=臟会・陽陵泉=筋会・絶骨(懸鐘)=髓会・膈腧=血会・大杼=骨会・太淵=脈会・膻中=氣会)ハソレゾレノ主管スルモノノ熱病ヲ治ス (45 難)
9. 七衝門(唇・齒・会厭・噴門・幽門・闌門・魄門)ハ重要デアル (44 難)
10. アル穴ヲ用イタイガ使エナイ事情ノ時ニハ根拠アル代用穴ヲ用イテモ良イ (73 難)
11. 病ガ伝変スル可能性(特に陰病ハ相剋的に…木→土→水→火→金→木…伝変)ガアル時ニハ伝エラレル側ヲ補シテ置ク (77 難)

注：七衝門に関しては穴の記述はないがこの難の言う所は特に重要と思う、呼吸と飲食物の通過がスムーズである事そして逆流させない事は、バイタルサインの問題としても、また健康状態の問題としても極めて重要であるが、この「七衝門」の機能的な正常さを保持する治療は、或る特定の「穴」を用いれば良いと言う性質のものではないので、穴の記述がないのであろう。

：以上の他に奇経の治療に関する記述が28難に「其レ邪気ヲ受ケテ畜スルトキハ腫熱ス・砭ニ之レヲ射ス也」とある。

#### ◇◇経の補穴と瀉穴と剋穴など

◆経脈にはそれぞれ「補穴・瀉穴・剋穴・自穴・原穴・郄穴・侮穴・絡穴」などがある。補穴は「母穴」、瀉穴は「子穴」、剋穴はその経の五行性を剋する性質を帯びている穴（木性の経にある金性の穴・土性の経にある木性の穴・等の如し）、自穴はその経の五行性と同じ性質を持っている穴、原穴は陽経では五行穴の他に設定されており「相火」の性質を持っていて「火性穴」の前か後かにあり陰経では「土性穴」である、郄穴（16穴）や絡穴（15穴）は各々の経上に設定された重要な穴である。これらの穴は治療上特に大切な穴であると共に切経上でもその経の変動の反応を良く現わすので重要である。

#### ◆その他の重要穴

- a. 八会穴
- b. 八宗穴
- c. 四宗穴
- d. 交会穴
- e. 四海穴
- f. 下合穴
- g. 奇穴

注：その他の重要穴も含めて要穴表を参照の事

#### ◇◇種々の配穴法

- a. 五行配穴法
- b. 原絡配穴法（経別治療）
- c. 腧募相配法（陰陽交流法）
- d. 子午配穴法（華佗子午・納甲法・納子法・主客相応法・靈龜八法・飛騰八法）  
＝按時配穴法とも言う
- e. 剛柔配穴法
- f. 背腧－四肢要穴相配法
- g. 上中下三部相配法
- h. 上下配穴法

## ◇◇経脈と穴の法則的な治療効果

- a. 病苦の所在部位（以下には単に病所と記す）に支配領野を持っている経は、その病苦の治療に効果がある。例えば、頭頂部の頭痛の場合は肝経・督脈・膀胱経、側頭部の頭痛は胆経・三焦経、前額部の頭痛は胃経、後頭部や項頸部の痛みには膀胱経などのよう）
- b. 横隔膜（一説では膈）より上部は手の諸経、下部は足の諸経が主として効果がある。
- c. 病所の付近の穴は、その病所に効果がある。身体を幾つかの体区に区分して、体区で判断する。
- d. 病因の帯びている五行性および病の性質の帯びている五行性さらに病の帰属する臓腑の持つ五行性は、経および要穴の五行性を運用して効果あらしめる事が出来る。
- e. 五行の運用は主として難経の法則に従う事が良い。
- f. 内蔵に影響するのは、経別（六合）の運用・腧穴と募穴をセットに用いる運用・原穴の運用などである。
- g. 郄穴は急性の病に効果があるが、それは陰経の場合は血に働き・陽経では痛みに作用する事によっている。
- h. ◆八会穴（血会＝膈腧・臟俞＝章門・腑会＝中脘・骨会＝大杼・気会＝膻中・脈会＝太淵・筋会＝陽陵泉・髓会＝懸鐘）と  
◆下合穴（膀胱＝委中・胃＝三里・大腸＝上巨虚・小腸＝下巨虚・胆＝陽陵泉・三焦＝委陽）とは、それぞれが主管する所の「熱アルヲ治ス」とされており、重要である。
- i. 五行穴
  - ◆井穴＝「心下満ヲ主サドル」＝木穴（陰経）・金穴（陽経）＝風木つまり肝胆の病症を要約して表現しているのであり、「心下満」は後に言う所の「胸脇苦満」である。
  - ◆滎穴＝「身熱ヲ主サドル」＝火穴（陰経）・水穴（陽経）＝熱火つまり心小腸の病症の要約しているのである。
  - ◆兪穴＝「体重節痛ヲ主サドル」＝土穴（陰経）・木穴（陽経）＝湿土・脾土つまり脾胃の約言された病症である。
  - ◆経穴＝「喘咳寒熱ヲ主サドル」＝金穴（陰経）・火穴（陽経）＝燥金つまり肺大腸の病症を約言している。
  - ◆合穴＝「逆気シテ泄スル事ヲ主サドル」＝寒水・腎水の性つまり腎膀胱の病症を約言している。この五行(兪)穴の主治証の記述は難経のものであるが、難経の記述の全体を考慮すると、五兪穴の治効には次の様な三つの側面があることが判る、
  - ◆病因の五行性に対応して用いる。
  - ◆病症の五行性に対応している。
  - ◆臓腑経絡の五行性に対応している。

- j. 絡穴は慢性病・虚性病に用いられるとされて来たが、井上雅文氏は「燥」と「労」に用いると更に具体的にした。此处で言う「燥」とは外感性の燥邪も含んでいるが津液の乾涸を来している状態つまり「虚燥」である、「労」も「虚労」である。この指摘は貴重なものである。
- k. 病証の三陰三陽の区分に経絡の三陰三陽の別が対応している。
- l. 臓腑の季節による旺相死囚休の循環リズムは病の消長上無視出来ない、また日周リズム（時間）による臓腑経絡の旺気と対経も治療効果上で大きな意味合いを帯びている。
- m. 下合穴（胃＝三里・大腸＝上巨虚・小腸＝下巨虚・三焦＝委陽・膀胱＝委中・胆＝陽陵泉）は腑に熱があるのを治す。今日では下合穴と八会穴は「熱」のみでは無く「寒」にも用いられている。
- n. 衛分・気分・榮分・血分の概念区分に応じる配経と撰穴の問題は未解決であるが、研究して解決する事を急ぐべきである。また開・闔・枢の運用も研究し解決しなければならない。
- o. 痰・飲・癆・には、それらに対応する穴を必ず用いる。
- p. 四海の治療の場合はそれぞれの治穴を用いる。
- q. 十五絡の病には十五絡穴を、奇経の治療には奇経を、経筋の場合には経筋を、用いて治療する。
- r. 四肢の熱を去る……雲門・髃骨（肩髃）・委中・髓空（腰俞）〔＝これは八髎穴説や腰俞説あり〕  
 胸中の熱を去る……大杼、膺俞（中府）、缺盆、背俞（風門）  
 胃中の熱を去る……氣衝・三里・上巨虚・下巨虚  
 五臓の熱を去る……五臓それぞれの背腧穴、魄戶、神堂、魂門、意舎、志室  
 寒熱俞（陽関～別名＝寒府）は重要である。  
 熱俞（五十九穴）、熱門、水俞（五十七穴）などの重要穴がある。
- s. 穴の子午による開闔の運用も効果が高いので、複雑な構造であるが研究して用いるべきものである。
- t. 交会穴は交叉する複数の経脈に影響する、また穴の所在部位（体区）の症候にも影響する。
- u. 『素問』調経論第 62 は、細絡が経気を妨げている場合には、先ずそれを除いて後に経脈を調えるべき事を指示している。また脳圧の上昇時の井穴刺絡の効果が高い事も良く知られている。その他にも刺絡の重要性は少ないものではない。研究を要する。
- v. 巨刺・繆刺も十分には紹介されてはいない、時に卓越した効果がある事は良く知られている。それ故に、綿密な学術的な研究と臨床的な研究によって、この分野の学術と臨床的体系とを確立されなければならない。

人身は多階層的で有機的に相互に錯綜し相関した立体構造であり全一性を持っている、それが動的に平衡している動的平衡体である、中医学はこの事を人身の整体性もしくは単に整体性と呼んでおり、またこの様な観点の事を整体観と言う。日本では「動態構造論的平衡体」とか「動態構造論的平衡性」と呼ぶ。これを解釈し説明するのに、幾つものアプローチがありアングルがある。或は陰

陽、或は内外表裏や上下や上中下、或は心身、或は五体（皮毛・肌肉・筋・骨・髓～～皮毛腠理・脈・肌肉・筋・骨）や五臓もしくは五臓六腑、或は気血や衛気榮血、或は三陰三陽、などなどである。これらを性質的に統括して収斂させているものが五臓であり、機能的に統合し連関させている体制が経絡の体制である。

◇穴の治効特性の運用は用鍼手技の適正さと切り放し難いものである。経穴学に記載されている経穴毎の治効は、多くの場合、他の穴との配合と関連しており、また手技の適切さとも関連している、また時には用穴の手順とも関連している。日常的な研究と観察と熟練とが要求される所以であり、判断力を鍛え上げる事が要求される所以である。

◇◇追加：経脈と穴の法則的な治療効果

### ◎衛と気

『温病学』が成立してからは、「衛」と「気」とは概念的に区別されるようになった、古くは「気・血・水」分類であり、更に古くは「気・血」分類であり、津液の概念はあったが「気・血」が基本になっていた。『難経』では「衛気」が一つのように取り扱っている、しかし、「衛」「気」「榮」「血」として概念区分が行なわれたことには、病症の研究・理解がより精密になった事が背景にあるものである。「衛」分の病証は、三陰三陽の六経分類の「足太陽」の「経証」と重複する部分が多い。違うところは「六経辨証」は『傷寒論』によったもので、「傷寒」病の「表寒実証」や「表寒虚証」に関する面が中心となるが、「衛」分の問題は「温病」の熱や湿の病証の虚実に関するものが主である。と言う点にあって、温熱の病に対応するには、『温病論』に基づく方が良いのである。「衛」の生成と機能についての理論の知識が必要である。足太陽と督脈の扱いが中心になる。『素問』熱論第31などにある「熱愈五十八穴」も治療穴の対象に入れておかななくてはならない。「気」分の病証は六経分類の「陽明病証」が大部分であるが「少陽病証」の熱実証の相当部分と重複している。「湿温」の場合にはあまり高熱にはならないが治り憎いものである、「温熱」病の「気分証」では高い熱の潮熱の状態になることが多いので、上記の「熱愈」の運用にも「陽明」や「少陽」の熱症に対応する穴の運用にも、「気分証」の時とは趣が異なる、「刺血」「瀉血」の施術の問題は無視できないだけで無くむしろ積極的に考慮することが必要となる。

### ◎榮と血

『難経』では「榮血」は単一の概念のようにあつかわれているが、『温病学』は「榮」と「血」は明確に概念区分をおこなっている。「衛気榮血辨証表」を参照すれば判かるように「榮」分病証や「血」分病証では、「榮分」「血分」に「温邪」が入っているのであり、「精神神経」や「意識」の障害や「溢血」「出血」などや「斑疹」などが生じる。「陰」分の「邪熱」を処置しなければならない状態である。これには「津液」を補う事を主とするものと、「陰分の邪熱」を「刺血」によって除く事を主としなければならないものがある。「腫脹」の有無や「固定痛」「深部痛」の有無と「二便」の状態如何に、注

意を十分に払うべきである。「意識障害」を来たしている場合には「意識回復」の措置が何よりも優先するので、いわゆる「醒腦開竅」法の施術を行なわねばならない。「痰」が激しくて呼吸の障害がある場合には呼吸の確保の処置を急がねばならない。

### ◎飲・痰・瘀

いずれも病理的産生物であり「津液」や「血液」より変化したもの、何かの原因で循環不全や代謝不全を来して産生物であるが、また、これは気血の疎通を妨げて病因性を帯びるものでもある。

外感病は『傷寒論』と『温病学』に基づいて対処するが、この場合の「痰・飲」は大抵の場合には外感病証に応じる治療に伴って消失して行くものであり、ただ病理的産生物としての範疇に留まるもので新たな病因性となることは殆どない。「瘀」の場合はやや事情が異なる、いわゆる「蓄血証」であって「腑」病の中でももっともこじれたヤッカイなものである。「太陽腑証の蓄血証」や「陽明腑証の蓄血証」がある。「破血通下」「理血疎通」「浄血」などの「血」熱と結滞とに対処する治療方法を採用することが必要となる。「血分」に「熱」が入っているのであるから意識・精神神経の症状を現わすこともあるので注意を要する。

雑病と内傷病の場合には「痰・飲・瘀」は、新たに病因性を帯びて来る。つまり、経脈を塞いでその機能を妨げるので、具体的な発症の契機となるとともに病証を規定することになる。従って、雑病や内傷病は五臓的に辨証して対処すると言うのが『金匱要略』で基本的に確立されて以来の治療上の原則であるが、これとともに「痰」「飲」「瘀」にも対処する措置を講じる必要があるものである。

「痰」の治療を例として考察すると、肺の気虚の「痰」・肺陰の熱実の「痰」・胃熱が肺を薫蒸している「痰」・腎水が虧損されている為の「痰」・その他と言うように多種類の「痰」がある、故に「痰」の成因と性質に即して対処する他には対応は不十分である。同様なことは「飲」にも「瘀」にも言えるのであるから、症候に応じて対処する以外には在り得ないものである。

◇以下に『甲乙経』の記述から「痰」に効果有りと解されるものを抜き出して見よう。

\* 中府……悪寒胸満・逆気・多濁水・喉痺など。

\* 雲門……咳喘不得息 坐不得臥 呼吸気索 咽不得 胸中熱 雲門主之、ほか。

\* 天府……咳上気 喘不得息 暴痺内逆 肝肺相薄 鼻口出血 身脹 逆息不得臥 天府主之、ほか。

\* 尺沢……喉痺…尺沢悉主之、ほか。

\* 経渠……胸中膨膨然 甚則交両手而瞽 暴痺喘逆 刺経渠及天府。

\* 太淵……咳逆煩悶不得臥 胸中満 喘不得息 背痛 主太淵、ほか。

\* 魚際……熱病振慄 腹満陰萎 咳引尻 溺出 虚也。鬲中虚 食欲嘔 身熱汗不出 数唾涎 血下 肩背寒熱 脱色 目泣出 皆虚也 刺魚際補之。ほか。

\* 少商……『甲乙経』の少商の主治症の記述を概括して見ると「瘧（マラリヤ）のような熱病の

寒厥や熱厥の症状に伴う煩悶や 或寒慄やの症状と腹部の脹満があり”喉中鳴” ”喘咳逆息” ”食不下”等の症候のものに刺して出血させる」という事になる。手太陰肺経の諸穴には全て咳や痰の治効が記述されているが、特に注目したいのは「天府」の「暴痺内逆 肝肺相薄 鼻口出血 身脹 逆息不得臥」という主治症の記述（つまり金木の相干の寒熱の病症である）や、「侠白」の「心痛 干嘔 煩満」という主治と「尺沢」の「心膨々痛 少氣不足以息」や「咳逆上氣 舌干脇痛 心煩肩寒 少氣不足以息 腹脹喘」やなどの主治症の記述（金と火の相干の寒熱病症）である。また「魚際」の「取魚際・太淵・大都・太白・瀉之則熱去 補之則汗出 汗出太甚 取内踝上横脈以止之」という記述他にある「補瀉」記述である、「金」経の「火」穴の運用を考えさせる。

- \* 合谷……瘖不能言 合谷・湧泉・陽交主之、喉痺合谷主之など。
- \* 商陽……熱瘧口干。楊上善一病起両手者 可取手陽明井 商陽…及手太陰郄孔最とあり。
- \* 二間……喉痺如哽
- \* 三間……寒熱 唇口干 喘息…、…善唾 胸満腸鳴…、喉痺咽如哽。
- \* 陽谿……胸満不得息…、喉痺。
- \* 偏歴……虚則痺隔…。
- \* 温溜……傷寒、寒熱頭痛、噦衄、肩不举 温溜主之…、喉痺不能言 温溜及曲池主之。
- \* 曲池……傷寒余熱不尽、胸中満…寒熱。
- \* 手五里……瘰癧 心下脹満痛 上氣、寒熱頸癢 適咳呼吸難 灸五里…。
- \* 臂臑……寒熱項癢…。
- \* 天鼎……暴瘖氣哽 喉痺咽痛不得息 食飲不下。
- \* 扶突……欬逆上氣 咽喉鳴 喝喘息